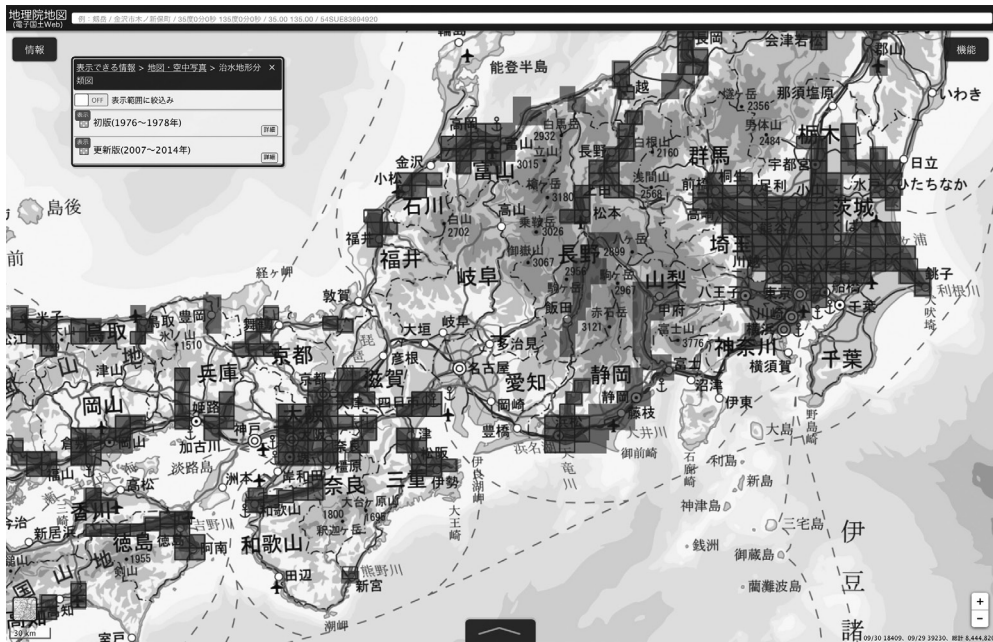


関東・東北豪雨で 活用の 防災データ

東海はどこに？



国土地理院サイトの治水地形分類図。
網掛けの表示が愛知、岐阜はすっぽりと抜けている。

常総市の浸水範囲と一致した 「治水地形分類図」

九月中旬に関東、東北を襲った豪雨。茨城県常総市で鬼怒川が決壊、水浸しの市街地から住民がヘリで救出されるなどの光景は、全国に大きな衝撃を与えた。二〇〇〇年の東海豪雨をはじめ、水害常襲地帯である東海地方は他人事では済まされない。しかし、過去の教訓がしっかりと生かされているかどうか、心もとない実態が、ある「地図」を透かして見えてきた。

「常総水害の被害と一致 治水地形分類図、浸水予測に効果」――。これは九月二十二日、東京新聞が一面に出した記事の見出しだ。今回の水害の浸水区域を、国土地理院（茨城県つくば市）が作成した「治水地形分類図」と照らし合わせると、過去に川の水が氾濫し、泥などが堆積した「氾濫平野」の範囲とほぼ一致。逆に、被害が少なかったのは「微高地」と呼ばれる自然堤防の一部であることが分かったのだ。

治水地形分類図は国の治水対策を目的に整備されてきたが、ハザードマップへの応用や地盤調査の基礎資料にもなるとして、〇五年から一般にも公開されるようになった。今回の豪雨では、常総市の破堤地点や浸水範囲などを分類図の上に重ねあわせ、パソコンやスマートフォンから誰でも見られる状態にした。記事中で地理院防災地理課の山本洋一課長は「想定外の異常気象が増えている今、地図を見て地域の危険性を知っておくことが大事。各自自治体がつたハザードマップとともに参考にしたい」と活用を呼び掛けている。

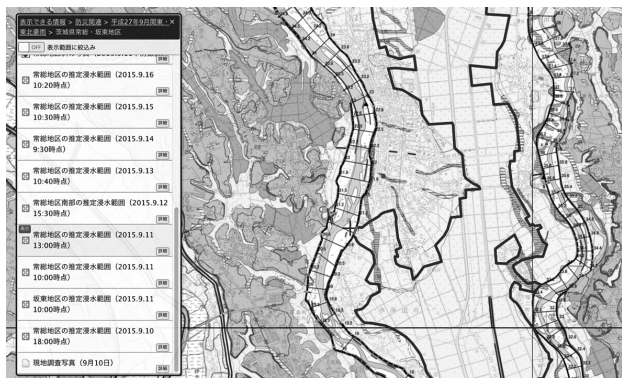
では、わが街でも……と地理院のホームページを開き、治水地形分類図を表示させてみた。数回のマウス操作で出てきたのは一九七六年度から七八年度にかけて作られた「初期整備版」と二〇〇七年度以降の「更新版」。しかし、いずれも私が住む名古屋のデータは一級河川の本曾川や庄内川があるにもかかわらず、まったく出てこない。全体を見ると三

重や静岡の一部まではデータのあ
る網掛けが表示されるが、愛知や
岐阜はすっぽりと抜け落ちてい
るのだ。

これはなぜか。地理院防災地理
課に聞いてみると、「確かに、全
国でもその辺りだけはわれわれに
データがありません」と認める。
その上で「愛知や岐阜に関しては、
中部地方整備局が一九七四年ごろ
に類似した図を作成しています。
しかしそれを作り直してウェブに
載せるかどうかは中部地整側と協
議中」だと明かした。協議の上で
作り直されるにしても、その時期
は「二〇一九年がめど」と、何と
も悠長な話のようなのだ。

縦割りで埋もれる 愛知、岐阜のデータ

そこで中部地整側にも取材して
みた。名古屋市の本局河川計画課
を訪ねると、「確かにこうした図
はあります」と、堀謙一郎課長
補佐が広げたのは「濃尾平野河
川地形図」という大判の地図だ。
一九七六年に当時の「建設省中部
地方建設局本曾川上流工事事務



関東・東北豪雨による茨城県常総市の浸水範囲を、
治水地形分類図に重ねたマップ

所」が発行。本曾三川の河口から
岐阜市周辺までの流域を一枚に収
め、平野部や自然堤防などが色分
けされている。ただ、分類は治水
地形分類図とやや異なる。

「七五年にこの地域に大きな被
害をもたらした安八豪雨を教訓
に、全国に先立って作成したと聞
いています。以来、管内の各河川
事務所と同様の図を作成し、国直
轄一三水系一五河川はカバーして
います」と堀課長補佐。その上
で、「これまでは局内で活用する
他は、研究者や防災関係者から要

望があれば提供していた程度。地
理院のように販売したり、ホーム
ページに上げたりということは頭
になかった。今回の水害で一般の
注目も集まったのであれば、まず
河川事務所単位でPDF化して
ホームページに載せるなどの対応
は取りたい」と釈明した。

しかし、バラバラのPDFデー
タではスマホ時代の市民には物足
りない。少なくとも地理院のマッ
プと統合するならば、この地図の
表現をレイヤー（層）状にデジタ
ルデータ化し、自在に縮小拡大で
きなければならない。それはかな
りの労力を要するはずだ。予算化
もされておらず、「できるにして
も二〇一八年以降になるのでは
……」と堀課長補佐は言葉を濁す。

取材後にあらためて調べると、
中部の地形図の基は一九五九年の
伊勢湾台風にまでさかのぼること
が分かった。台風襲来の三年前、
当時の総理府が行った「本曾川流
域濃尾平野水害地形分類図」の浸
水想定が実際の被害とほぼ一致、
当時の中部日本新聞は「地図は悪
夢を知っていた」と見出しで指摘



国交省中部地方整備局が保管する濃尾平野河川地形図
(左) と庄内川の治水地形分類図 (右)

していた。このエピソードは地理
院のホームページには掲載されて
いるのだが……。

防災の「先進地」だった東海地
方の行政が、いつしか初心を忘れ、
縦割りの中でせっかくの情報埋も
れさせてしまふ。こんなことで
は「悪夢」はまた繰り返されるだ
ろう。そのときに、「地図だけが
知っていた」ということにならな
いよう、市民としても最大限の関
心を持つ必要がありそうだ。

（ジャーナリスト・関口威人）